労働者に国境なし

落盤から危うく助かる

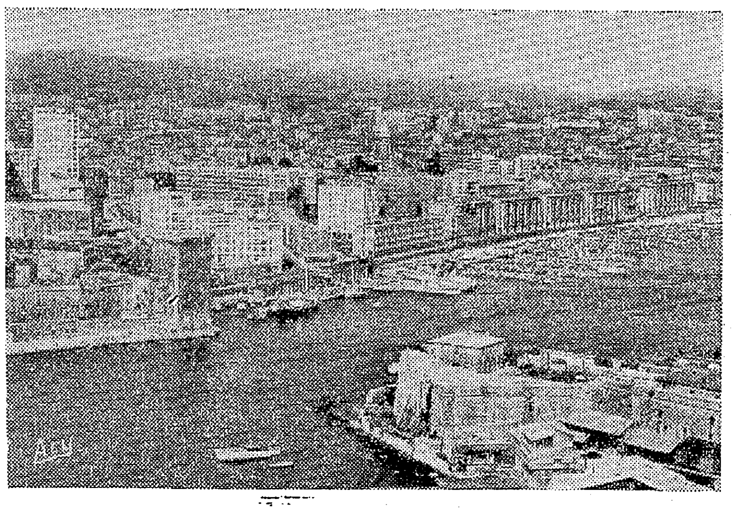
西独派遣の仲間たちは今日も元気で西独のヤマではたらいているが、外国のヤマだからといつてけつして安全なところではない。落盤の危険におかされ体を張つて仕事をしていることは、日本とちつとも変つてはいないのだ。第二陣派遣者の一人村谷泰一さん（三池三川支部出身）も変災に見舞われ、危ういところを命拾いしたが、寸時も油断はできないところである。組合の意義、労働者の苦しみを痛感した村谷さんは、つぎのような手記を寄せている。

奇蹟的に助かる

○…銀河いよいよ遠く、夜空の美しさにも夏季の終りをおもわせるころとなりました。

私たち第二陣の十三名も、当地に安着いたしましてからはや半年になりました。みな元気でやつています。お便りを出そうとおもいながら今日までおくれ、まことに申訳ございません。組合員のみなさまもお変りなくご精励のことと存じあげます。

先日（九月六日）私のはたらいている現場で落盤があり、そこではたらいていた八名のうち三名が、尊い命をうばわれました。さいわい、そのなかの私と小森君（常磐炭鉱出身）は、奇蹟的に他のドイツ人といつしよに助かりました。九時半に落盤があり、三時に無事助けだされました。その六時間のあいだいろいろかんがえましたことを書かせていただきます。


一陣が休暇先から送つたマルセイユ港の写真

歴史でまなんで労働者の苦しさ、はたらく条件の悪さを知つていたけれど、三池炭鉱ではたらいていた私は、三池の坑内条件は当然のようにおもつていました。ただしドイツにきて、もし組合がなければ、組合が負けたらこのような苦しみにあうのだと教えられた感じでした。

坑木がすくない、払つたあとの充填は労働者不足でしない。死んだ仲間の一人であるユーゴ人は、その日はじめて私のところにはたらきにきたのです。上の坑道ではたらいていたけれど私のところに欠勤者がいたため、九時ごろ係員の命令できたのです。彼はまだ十九才、おなじ外国にきたものの気持はピッタリでした。彼が水で苦しんで死んでいく姿は、一生わすれることはできません。私も七十二時間ごになりいまさらのごとく災害の大きさに驚かされました。

幅五十センチ高さ一メートル横幅一メートルのところにいた私たち五名は、国境のないおなじ労働者でした。お互いに励ましあつた姿を想像して下さい。

では、世界中の労働者にこんな苦しさがないように一日一日と前進してください。遠い異国より組合の発展を祈ります。　村谷　泰一

足あと

三池の闘いの歴史はながい。記録によれば三井の手にうつる以前、つまり官営時代にすでに火の手はあがつている。明治十六年九月には大浦坑であまりにひどい、非人間的な取扱いに、暴動にまで発展している。

だが何といつても生々しいのは三井なつてからは、大正七年の万田坑暴動と、つづいて十三年の製作所を中心とする待遇改善の闘いであろう。後者はまず製作所が立上り、万田、四山、宮浦、染料、製煉、港務所など三井系事業所のすべてが立上りそれぞれ争議団を結成して、のちには連合争議団にまですすみ、約一カ月間、当時としては実に整然として闘争をすすめ三井に体当りしたのであつた。当時の闘争をふりかえつて製作所にいた人はこういつている。

「まつたくヒドかつたですね。会社の肩たたきは猛烈なものでしたいまのように組合はなかつたが、争議団は各支部、支部で情宣をやつていました。なかには情宣する人間が肩たたきに負けて、コロンだものもありました。会社はいまでいうロック・アウトで締めだした。私たちは資金に困り、資金カンパ隊をつくり、行商隊が遠くは鹿児島あたりまで行きましたヨ。私も春先きであつたのでラツキヨ売りに行つたのを想い出します」と。

戦時中は兵器作り

カンパのため行商隊

当時の闘争のチャンピオンであつた製作所も、坑内の機械化がいまのようにすすんだごとく、ながい変遷を経てきた。工場と設計事務所がいつしよで、設計されたのがすぐ現場へながされてくる。たとえば鋳型工場などは手で砂をかためていたという。それがいまではサンドランマーが活躍して、労力は半分以下になつた。製罐あたりでもプレスするのにハンマーでやつていたものである。

だが、ここでいちばん大きな改革をみせたのはいままでつかつていた鋳鉄をハガネにかえたときだろう。昭和八年ごろである。坑内の捲揚機一式、カツペなどつぎつぎとハガネにかわつていつた。

支那事変、太平洋戦争とすすむにつれて、製作所ではご多聞にもれず戦争兵器づくりへかわつていつた。工場も渡瀬にまで拡張（砲弾や高射砲の外側、海軍の水雷関係品がつぎつぎとできあがつた）し、職制は強化され、軍に納める製品はとてもやかましく、体はクタクタになり泣くに泣けない辛さだつたという。毎日居残りしなければならない、定時に帰ろうとすれば文句をいわれ、いやでも遅くまで残らなければならないのだ。

青年学校ができる前は、市内の小学校で夜学がおこなわれていたが、仕事に疲れて夜学をサボればすぐわかり昇給にピーンとひびいてくる。こういう暗い時代を通つてきたのである。

だが製作所は製品をつくる現場だ。苦労の末、製品ができたときは何もかも忘れてしまうという。戦前染料の三重ガマを鋳物工場でつくつたという人は当時を想い出して、苦心して涙まで流してつくりあげたが、今でもどうしても忘れられないとシンミリ語つていた

いまや美術の秋

一年を迎えた三作日本画研究会

三作日本画研究会が発足したのは昨年の十月だから、ちようど一年になる。

発足当時は会員も三十四名という多人数であつたが、三カ月ごとにはぐんとへつて、十三名、いまでは九名をかぞえるほどの少人数になつたが、一年間頑張りつづけた人たちだけにみんな熱心な人たちばかりである。

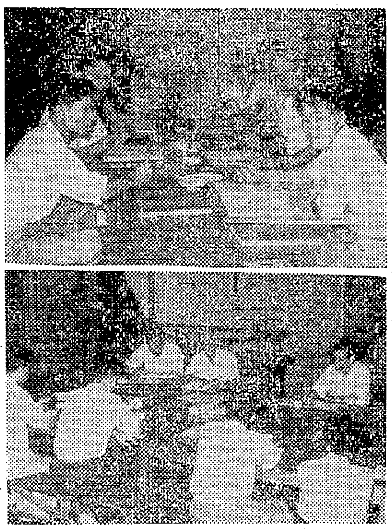
毎週水曜日午後四時半から七時まで日本画の野元琴雨先生をかこんで、絵筆に精神を集中させている練習場は講堂裏の小部屋である。画帳にサツ、サツと木蓮の花が描かれて行く、油絵と違つた淡白な味がなんともいわれぬ魅力となつて、絵筆の先をみていて感心させられる。

蘭の花から出発して、諸種の草花ついで動物、そして最後に孔雀まで行けば、日本画の一応の課程は終了するというが、だいたいこの研究会では三カ年の期間をおいている。

いよいよ美術の秋を迎えて研究会の人たちの制作意欲はぐんとあふられていることだろう。会の幹事をつとめている小川研さん（経理）は、会の一切の世話をやつているが、例年県展に名をつらねているというベテランである。

昨年十一月におこなわれた製作所綜合美術展には、研究会が発足して間近かだつたが、この会からも多数の出品があり、美術展を飾つたものである。

現在少人数のため会費面などで苦しんでいるが、愛好者があれば遠慮なく一緒に勉強して行きたいと小川さんは語つていた。一日の仕事を終えたあと、無心に絵筆と取組む研究会の人たちの姿は無心そのものである。


写真（上）は研究会（下）短歌会

三の番号は如何

三鉱労組の市内電話は三〇三三番で、三鉱労組の唯一の情報収拾機関でもある。

この電話は平均毎時四十分間通話がなされているので、使用度数は大牟田では三役クラスである。

現在三〇三三番の外に市外専用二番があるが、これは福岡その他が直通になつたので一般市内電話に切り換えたいと検討されている。切り換える場合「三」の番号の都合のよいのはないかといつている。それは、組合結成が二月三日、ストライキの妥結が六十三日、百十三日、六十三日で三に縁があるのでトクに考えたらしい。

もぐら談義

出したい人

三鉱労組ではいよいよ二十四日告示で政治局員候補の選出に入るが、大牟田市、荒尾市の中心勢力であるだけに保守、革新ともに注視の的である。

政治局員として本当に信頼出来る人を出さにやいかんと組合員は勿論、主婦会の皆さんも熱心。とくに中央委員会では全組合員が信頼する人をという声が沢山だされた。

「出たい人より出したい人」

先手をうつ

九月二十日の中央委員会は炭労、県評、大地評の経過報告や運動方針の報告、討論でまさに中央大会クラスの論議がなされた。

炭労大会は二十五日から東京で開かれるがこれに本部の久保田副組合長はじめ本部、支部から十名が代議員として出席する。

出席の挨拶に久保田副組合長「気のきかぬ者ばかりですが宜敷く」との挨拶に「先手をうつたな」は委員の弁。

農村青年と交流

宮浦行動隊が懇談会を

宮浦支部行動隊では昨年から他単組の人たちとの交流をはかるために、いろいろ懇談会をおこなつてきたが、こんど二十一日に農村の青年たちと懇談をもち、炭坑と農村の青年のもつ悩みや、生活上の問題を話合い、労農提携していこうとしている。

宮浦支部は昨年の平和闘争のとき南関地域を受もつて情宣活動をすすめたが、とくに中尾、岡本の両部員がここの担当オルグになつてはたらいたが、はからずも青年団長と知りあいになつた。

青年団長の話をきくうちに「保守党では自分たち農村の生活水準を引上げることはむつかしい。自分たちは労働者と手をつながなければならないとおもう。だが、新しいかんがえをもつていても、周囲が保守的だから、ややもすると村の会合などでも結局は古いかんがえに流されてしまう。何とかしてこういう流れを打開したい」という要望がおこつていることを知つた。

これを知つたオルグは、では青年団は支部の行動隊とおなじような形だから、おなじ悩みを話合つてみてはどうだろうということで、この懇談会のキツカケができたものである。

こういういきさつで二十一日から農村青年たちとのはじめての懇談会に発展したのだが、労農提携がつよく叫ばれているときだけに、この懇談会を通じての、こんどの労農提携への素地をつくつて行くことになつた。

当日行動隊からは各班から出席者をだし、約十五名以上が出席する予定である。

なお、行動隊では交流懇談会は主として冬期に計画しており、これは、冬の間は屋外の集会などが比較的にすくないので、この機会を利用して交流して行こうというものであつた。

臼井に支部長杯

港務支部のソフトボール

第三回港務支部の支部長杯ソフトボール大会は、秋晴れの十四日午前九時半から新港球場で参加二十二チーム（うち一チーム棄権）ではなばなしくひらかれた。

港務支部には地域分会が現在二十八あるが、二十二チーム出場という、多くの出場チームにみられるように、この日のソフトボール戦はなかなかの盛況で、球場を三分して三パートにわかれ、熱戦をくりひろげ、白球を青空にかつとばした。

ちようど機械化、合理化の交流中でもあり、執行部はほとんど参加できなかつたので、大会役員や審判には、野球部の人たちや、分会役員の人たちがあたり、役員や審判になつたり、自分の分会の選手になつたりの大活躍で、大会終了まで目まぐるしい大活躍であつた。

試合は好プレーや熱のはいつた敢闘ぶりを随所にみせ、応援につめかけた分会員を喜ばせ、また珍プレーもとびだし、和気あいあいとしたなかですすめられた。

昨年、一昨年と優勝し支部長杯をものにした強豪新港チームの三連勝なるか、みものだつたが、臼井チームの攻守ともにすぐれた試合はこびで、ついに新港を降し、優勝戦は臼井対宮浦のあいだで、激しい試合をえんじたが、六対三と三点のリードで臼井分会が初の優勝をとげ支部長杯をかちとつた。

当日の試合成績つぎの通り

一位臼井チーム　二位宮浦チーム

三位新港チーム　四位平井チーム

三作短歌会が活動

ちかく機関誌も発行

〃三作文学〃中断いらい、ひさしく鳴りをひそめていた三作支部の文学活動は、あらたに「三作短歌会」の誕生をみて新しい活動をはじめだした。

現在会員二十名、少人数ではあるが増加をしめしており、毎月一回例会をひらき、講師に岩本宗二郎氏を招いて互選、批評などをつづけている。

また、機関誌も月一回の発行を計画、ちかく初号がでる予定である。

なお短歌会では組合の闘争が熾烈なときには、闘争短歌会も催したいとその構想を述べているが、各支部の短歌会や、大地評傘下の単組の短歌会ともどしどし交流して行く計画もたてている。

なお第二回の例会は十七日に組合事務所二階でひらいたが、互選の結果、入選、佳作つぎの通り

入選　松田　賢介

深夜業の溶接光は屋根裏に反射なしつつ孤独をたもつ

磯本　泰達

希望もちて若きは生きゆく職場八分に負けてはならじと鋳鉄を流す

佳作　北原　一男

ひとりいて酒くむ背を藤の花ほうけ飛び来つ吾が膝の上に

試運転に向ふローダーのハンドルそれキヤタピラに草ふみしだかれぬ

志水　英輔

互選会に出すべく歌を練る吾は仕事合い間に汗ばみて居る

永松　運造

ながかりし闘争終り丹念に汗に汚れし鉢巻を洗う

原田　滑春

住み馴れし我が家を出でてゆく我れの後を母は見給ふ

江上　郁広

提灯をつけてデモれる隊列の行きあへば互に提灯を振る

永松　運造

防火用水面のかえす朝陽さし運道の黒き壁にきらめく